

3-1編集企画体制への道(2)

出版事業②「資料集」を作る(下)フットワークとデスクワークの日々(後)

代表取締役 吉田 隆

前号で、これからは商品性を問われる時代であると述べた。資料集の担当者といえども、自ら手がける本に対し、企画者としての目と商品開発者としての目とを合わせ持つ必要がある。これは、「最新情報」を求める企画者の目と「原稿品質」を確保する編集者の目に加え、担当者が「コスト意識」を持って本作りに取り組むことを意味する。

●制作時間、プロのスピード

こうした管理業務と企画編集業務とはえてして両立し難いものだが、深刻な出版不況が続く中、投下資本回収に不可欠なスピード経営への回帰を迫られる出版各社の事情を、科学ジャーナリストの〇〇〇〇氏に伺ったことがある。

〇〇氏は、東京大学理学部を卒業後、大手、中堅出版社の理工系書籍部門の編集企画部長職を長年務めた経験を持つ編集のプロである。

「コスト削減対策としては、厳しい原価管理の他、次のような取組みを行う。中堅A社の場合、編集制作を外注せず編集企画部内を企画部門と編集制作部門とに分ける。企画スタッフは担当書籍の8割は企画のみを行ない、原稿入手後は進捗管理に徹する。ただし2割は自分で編集制作まで手がける。その理由は制作上のセンスを磨きかつ原価管理意識をもつようにするためである。

逆に編集制作スタッフも担当書籍の2割は企画を担当し、編集者の財産となる人脈の開拓と企画力の増大に努める。

また、スピード優先の出版が求められる現代にあって、大手になるほどエディター意識が強く、現在、停滞気味の出版社は編集に時間をかけすぎてきたきらいがある。そんな時代において、編集制作に求められる能力とは原稿を細かく読み込む力ではなく、原稿の大筋の流れを押え、文の整合性をチェックする力である。当然、そこではプロのスピードが要求される。1日に割ける時間にもよるが専門性の低い単行本なら1~2日以内、ページが厚い専門書でも3~4日が目安となる。大手K社でも、中堅A社でも、あくまで発刊スケジュールが至上命令なので、基本的に編集に時間をかけすぎないという暗黙の前提がある。特にマニュアルはないが、読み込む速度や作法に一定の基準を作る方法もある」

●資料集からハンドブックへ

さて、NTS設立後手がけた資料集は、「液体クロマトグラフィー工業化技術資料集成」(昭和62年1月刊行)1冊だけである。昭和62年より小野社長に勧められた電話営業を開始し、「液クロ」はその最初の商品となった。残念ながら1冊で終わった理由は、主に時間的理由によるものであった。当時の編集企画スタッ

フは私1人だけだったが、上記廉価本や中型本「クリーンルームの運転・管理ハンドブック」(昭和62年12月発刊)の他、2500頁の「設備診断予知保全実用事典」(昭和63年7月発刊)、1200頁の「表面科学の基礎と応用」(平成3年9月発刊)という超大型本に加え、講演録「国際版超臨界技術の理論と応用」(昭和62年9月発刊)、翻訳本「食品タンパク質ハンドブック」(昭和63年9月発刊)、執筆者1人の小型本「食品開発のためのバイオ技術活用法」(昭和63年11月発刊)など、種々のタイプの本作りに次々挑戦し、それらを同時期に進めていた。本以外に毎月2本のセミナー開催を義務付けている身としては、調査に手のかかる資料集まで手が回らなかったのである。やがて、3年後の平成2年に〇〇、〇〇が入社すると、編集企画部と本作りは新たな局面を迎えることになった。

次回より、「大型本」「講演録」といった新しい本作りの物語に場面を移すことにする。



●今月の人事
【入社】

●編集後記

水兵、リーベ、僕の船、水はH₂OでCO₂が二酸化炭素。私の化学の基礎知識(?)今回のインタビュー触媒がテーマ。熱い思いを語られ、思わず熱中…。でも、一言いいなかった「ひらがなで話して」表紙にもその思いが飛火…。化学の香りを少しでも味わっていただければ幸いです。もう秋、触媒も女心の様…。私の感想でした。(あしだ)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

NTSニュース

2003年9月号(通巻55号)
2003年8月25日発行